

「発見」学講座

～言葉の森へ～



高野 てるみ
たかの・てるみ

映画プロデューサー。'87年映画配給・製作会社「巴里映画」を設立。フランス映画を中心に、配給・製作を手がける。著書に『ココ・シャネル女を磨く言葉』(PHP文庫)、『あなたを変える ココ・シャネルの言葉』(イースト・プレス)、近著に『恋愛合格! 太宰治のコトバ66』(マガジンハウス)がある。2013年『パリ薙刀ノ夜』を配給。

●21世紀は、政治・経済の第一線ばかりでなく、あらゆる分野で、女性の存在がますます重要になってきています。ファッションデザイナーというよりもアッショング・デザイナーとして、ココ・シャネルの生き方が、私たちの指針になるのではないかと思います。

高野 2010年に上梓した『女を磨くココ・シャネルの言葉』(マガジンハウス)が大変な反響で、続編も出すことになりました。その翌年に東日本大震災が起こり、たくさんの方々が亡くなられました。残された者たち、喪失感に打ちひしがれたときこそ、という言葉が、シャネルという人はどんな人だったのでしょう。

高野 ココ・シャネルという人を考え

がいる」とも言っています。彼女がもし並の人ならば、どん底から這い上がつて成功を勝ち取った自分に慢心して、そのような境地にはならなかつたと思います。他人への恨み、羨み、妬み、嫉み、傭みを自制できる心がシャネルにあったからこそ、彼女は成功できたと思います。

●彼女の写真を見ていていつも思うことなんですが、いつもどこか覚醒して

「私は自分の生まれを憎んでいない」という言葉が最も重要。

るとき「私は自分の生まれを憎んでいない」という言葉が最も重要です。

●母に死なれ、シャネルを修道院に入れて、その後一度も会おうとしない父。決して恵まれていなかつた、その出自を言つているのですね。

高野 「そうであつたから、今の私

ルの言葉の中にいくつもあります。

●栄誉も富も獲得しながら最愛の恋人をはじめ、その後も大事な人を失い見送つた。第二次世界大戦後はフランスを離れ

スイスで引退したかのようでしたが、なん

と71歳になつてから復活を果たして、世界中にココ・シャネルファンを増大させた。シ

ャネルという人はどんな人だったので

しょう。



©Hulton Archive/Getty Images
イギリスのウェストミンスター公爵(写真左)と。シャネルは紳士服に着目し、素材や着心地を研究した。シャネルスーツは公爵の着こなしからインスピレーションを得たといわれる。



ココ・シャネル(1883-1971)
Coco Chanel

フランスの女性ファッションデザイナー。女性の生き方のモデルとして、その評価はますます高まっている。英国のノーベル賞作家パーカード・ショーは、「20世紀の偉大な女性はキュリー夫人とココ・シャネルのふたりである」とまで評した。シャネルの多くの作品は、男性に従属しない女性の自立をテーマに生み出され、世界中で熱狂的に迎えられた。唯一無二のその個性から紡ぎ出された言葉は、ファッションという枠を超えて、永遠の光輝を放ち続けている。

めげない、くじけない、おもねらない
50歳過ぎたら彼女が必要になる

ココ・シャネル の生き方